



砺波総合病院から

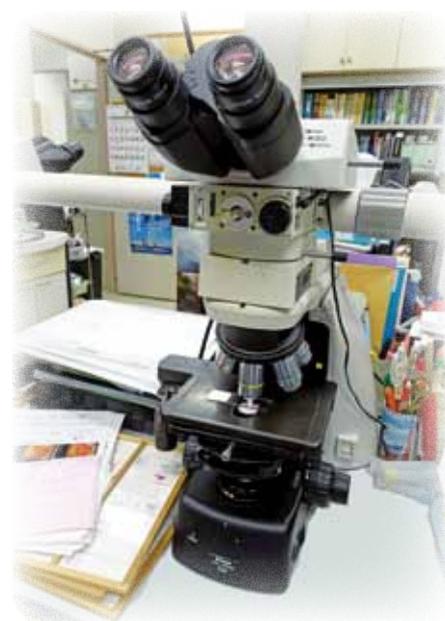
病院のホームページもご覧ください。

市立砺波総合病院 ☎32-3320

日本人の死因の第1位が 「悪性腫瘍」、がんです。

市立砺波総合病院 病理診断科

部長 寺畑 信太郎



がんには胃がん、大腸がん、膵がんなどの消化器領域のがんや肺がん、乳がんや子宮がんなどの婦人科領域のがん（乳がんはまれに男性にも発症）、膀胱がん、腎がんなどの泌尿器領域のがん、皮膚がん、耳鼻咽喉科領域の鼻腔や口腔、咽頭、喉頭などのがん、さらには血液系細胞のがんである白血病や悪性リンパ腫、脳腫瘍などヒトの体のさまざまな部位より発生し、1人で複数のがんが発生する場合もあります。

がんが発生する原因は不明ですが、近年さまざまな生活習慣との関連を題材に、メディアなどでも取り上げられており、国民の関心も高まっています。がんの診断はX線、CTスキャン、MRIなどの画像検査や胃力メラ、大腸力メラ、気管支鏡、膀

胱鏡などの内視鏡検査で推定しますが、最終的には病変から細胞や組織を一部採取して標本とし、病理医が顕微鏡下で観察し、がんであるかどうかの最終診断を行います。

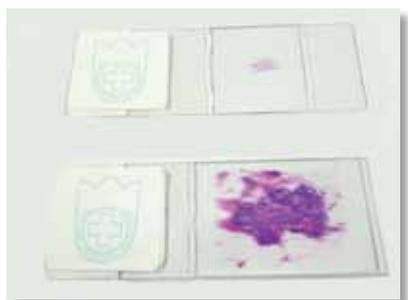
がんの最終診断のブロである病理医は、全国的にも内科や外科に比べて大変少数であるため、常勤病理医のいない病院もあるなか、当院には2名の病理医が常勤しています。

今回は、若い人にも多い乳がんについてお話しします。乳がんもいろいろです。乳がんと言われただけで、死んでしまうのではないかと不安に思われる患者さんも多いですが、乳がんの悪性度はがんの組織像の違いにより異なるものの、同程度の進行度（Stage：ステージ）の他臓器のがんと比較し

てよいことが知られています。乳がんは乳汁を分泌する乳腺組織の細い管の部分から発生しますが、管の中で増殖している間に転移はしません。また管の外にがんが増殖している場合でも近くのリンパ節に転移がみられない場合は多くの方は安心してよいのです。乳がん細胞の性格については女性ホルモンに対する感受性のあるものとならないものがあり、その判定は治療薬を選択する際に重要で、その判定も病理医が行います。当院では外科、放射線科、病理医および超音波検査に携わる臨床検査技師が週に一度合同カンファランスを行い、年に約50例ある乳がんの手術全例を一例ごとに丁寧に検討し治療方針を決定しています。

最近では多くの例で、部分切除が行われるようになっており、その

際は切除部分にがんの露出が無いかが、とり切れているかどうかを術中に病理医が迅速に標本を作成して観察します。これらの検査は病理医が常勤しているからこそ安心してできることであり、結果も概ね当日に把握することが出来ます。乳がんは外から触れる場合が少なくあり、早期に発見される可能性が高いがんです。その際には気兼ねなく当院へ外科を訪れてください。また希望があれば病理医からがんの状況について外科医と異なる病理学的視点から説明することも可能です。ぜひ遠慮なく外科医やがん相談支援センターなどを通じてご相談ください。



乳がんのプレパラート
上は生検標本、下は切除標本